

良心を育む学校

奨励	浮田 倫太郎【うきた・りんたろう】
奨励者紹介	同志社女子中学校・高等学校社会科教諭

「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役に立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。また、ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」

(マタイによる福音書 5章13—16節)

はじめに

みなさん、おはようございます。

同志社大学のお隣にある、同志社女子中学校・高等学校で社会科の教員をしております、浮田倫太郎と申します。本日は、同志スピリット・ウィークという、同志社でとても大切な時期に、このようにチャペル・アワーで、ここ同志社礼拝堂でお話をさせていただく機会が与えられましたことを、大変感謝しております。

さて、本日のお話は、「良心を育む学校」とタイトルをつけました。

同志社大学に学ぶ学生のみなさん、そして同志社につながる方でしたら、一度は「良心」という言葉を耳にしたことはあるかと思います。同志社大学のホームページには大学の理念として「良心教育をめざして」とあり、そのなかで「同志社教育の原点は『良心』といえます。」と掲げられています。今日は同志社女子中高の卒業生の方もちらほらお見えになっていますが、同志社女子中・高生にとっては「良心」はあまり馴染みのない言葉かもしれません。実は同志社女子中高の中で使うことは多くはなく、どちらかというと今日読んでいただいた聖書箇所、「地の塩、世の光」の方が耳なじみのある言葉ではないかと思います。でも、同志社全体としては「良心」を学校の建学の精神と位置付けています。そしてそれは、結論から言うと、同志社女子中高で大切にしている「地の塩、世の光」と何ら矛盾するものではありません。

それでは、同志社の建学の精神たる「良心」とは何でしょうか。

「良心とは何ですか」あるいは「あなたにとっての良心とは」と尋ねられたら、すぐに答えられますか。悪いことをしてはいけないということ、善い行いをすること、……。あらためて考えると、良心とは難しい言葉です。ここでの良心という言葉は、いわゆる儒教的な、「良い行動をなさい」や、「親や目上の人を敬いなさい」「弱い人を助けなさい」などという意味合いの言葉ではありません。では一体、同志社が大切にしている良心とは何なのでしょう。そここのところを、今日はみなさんと一緒に考えたいと思っております。

創立150周年に当たり

さて、同志社は2025年、もうすぐ創立150周年を迎えるのですが、昨年150周年のための記念事業が立ち上がり、私もそのプロジェクトの委員を務めております。法人の中にある、大学をはじめ、各中学校・高等学校、小学校や幼稚園など、すべての学校から委員が集まり、150周年の様々なプロジェクトが進められています。

150年という長い歴史があり、そしてさらにこの先へと続く同志社の未来があります。かつて、新島襄は勝海舟から「同志社はいつになったら完成するのか」と尋ねられました。これに対して新島は、「同志社の完成には200年がかかる。」と答えたと言われています。とてつもない壮大なスケールです。私たちが今、身を置いているこの総合学園たる同志社は、これでもまだ完成はしていないということになるわけです。では、仮に200年で完成を迎えるとして、150年から200年の間に、同志社は一体何をすべきなのでしょう。同志社がこの先も大切にしていかなければいけないこととは何なのでしょう。

150周年を迎えるにあたり、世の中に「同志社はこうですよ」「こんな学校ですよ」と大々的にアピールしなければなりません。多くの人に伝わるように、余分なものをそぎ落とし、同志社の教育の核心に迫らなければなりません。150周年の委員でさんざん頭をひねりました。同志社はいろんな主義を掲げています。自由主義、キリスト教主義、国際主義、そして良心教育。そういったもののなかで最も大切なものはなんだろう。一あれやこれや考えるなかで、やはり教育者であり、そして牧師であった創立者新島襄の理念に立ち返ることが必要だろう、そういう意見にまとまりました。ただ、これがまた難しい。学生のみなさんは、「建学の精神とキリスト教」を履修し、法人内各学校出身の方は、嫌というほど新島襄について学んできたと思います。けれど、新島の思いの全てを語ることはできるでしょうか。それは無理ですね。我々もこの難しい問いにぶつかり立ち止まった時、同志社大学神学部の元教授で、新島襄研究の第一人者である本井康博先生のお力をお借りすることになりました。今日この先お話しする良心についての知識は、本井先生のご教示あってのもので、あらかじめお断りしておきます。

「良心」とは何か

さて、そもそも新島襄が目指した学校教育、同志社の教育の礎とは何だったのでしょうか。優秀な学生を育てるために学力を鍛え上げることでしょうか。とにかく国際社会に打って出るため、英語を鍛えることでしょうか。それらも当然、教育の目的の中にあっただけでしょう。

今も、同志社では確かな学力の育成、英語教育に力を入れています。そしてそれと同時に「良心教育」という言葉を使っています。まさに今日のタイトル「良心を育む学校」というわけですが、実は新島自身は「良心教育」という言葉は一切使っていません。もっとも、生涯において「良心」という言葉は何度か使っていて、その中でもっとも有名なものは、1889年11月23日付で横田安止に宛てた書簡の言葉、「良心之全身二充滿シタル丈夫」(『新島襄全集』4 書簡編II 同朋舎出版 1989年 245頁)だと思います。この言葉をもとに、今では良心碑と呼ばれる新島襄の記念碑が、法人内の学校にあわせて9つ建てられています。

新島がここで横田に語った「良心」とはいったい何でしょう。良心という言葉は古くからありそうな言葉ですが、実は明治時代に西洋から日本に入ってきた英語を、日本語に無理やり翻訳した言葉です。ももとの英語はconscience。礼拝説教やキリスト教の伝道場において、よく使われていた単語でした。この言葉は2つの部分から成っています。Conとscience。conは「共に」という意味の接頭語、scienceは「科学」、「知識」、「理解」といった意味です。つまりconscienceは、「ともに理解する」、「ともに知る」といった意味を持ちます。これを明治時代の日本人が苦勞して「良心」と訳したわけです。ただ、新島自身、訳された良心という言葉にしっかりとこなかつたこともあったようで、手紙のなかで英語でconscienceと記したり、コンシエンスとあえてカタカナ英語で書いたりすることもありました。新島自身、良心とはそれほどに誤解を生じさせる危険性がある言葉という認識があったのではないのでしょうか。現に、現代日本においても、同志社が掲げる「良心」は本当に誤解されやすい言葉になっています。多くの方が、罪を犯してはいけない、だとか、人の物を盗んではいけないといった意味での儒教的な良心、と捉えられます。そこが、牧師であった新島の恐れるところでもあったのではないのでしょうか。

Conscienceのconの部分、つまり「共に」という言葉はとても重い言葉です。良心は、自分ひとりの良心ではないわけです。では、何と共に、あるいは誰と共に考えることが、良心なのでしょう。同志社において良心教育を大きく前面に打ち出した方は、実は同志社の前の総長、大谷實先生です。大谷先生は良心教育を進めていくにあたり、先生のご著書のなかで、良心を次のように解釈されています。「良心とは、対話する心」のことである。この人間の良心には二つの部分があり、一つは、自分の理性を働かせて、「自分の中で対話する」心、言い換えると「自問自答する」心であり、もう一つは「人間(人)を超越したものと対話する心」(大谷實『同志社総長「思い」を語る』成文堂 2016年 17頁)

このように述べられています。自分との対話のなかで、良心とは何かを求めていく。なるほど。では、「人間を超越したもの」とは何でしょう。みなさん、お分かりかと思いますが、神です。

このことを知り、私はストーンと心のつかえが落ちたような気持ちになりました。良心というのは、まずは自分自身との対話が必要です。でも、自分自身だけではだめなわけです。conですから。自分はこう思うのだという自分の物差しでの独善的な良心ではないわけです。自分だけではない、大いなる神と共に、もっと言えば神の視点に立つ、これこそが究極の良心である、私はそういう考えに至りました。

神の視点、これはシンプルに、こんな時には神ならどうなさるのか、こんな時にイエス・キリストならどうされるのか、ということです。自分自身が考え、話し、行動する時に、たえず大いなる神と対話することが重要で、そのことこそが良心と言えるのではないのでしょうか。

良心を問い続ける教育を

あらためて良心、conscienceは奥が深い言葉だと思います。当たり前ですが、人間は神ではありません。だからこそ、conなのです。「共に」しかありえないわけです。様々な学問を修めて大人になってどれだけ賢くなっても、「自分の良心は絶対的なんだ」、そんな風な日が来ることは決してないのです。自分の価値基準だけで判断する、これは良心とは言えないのです。

このような良心を育む学校、それが同志社です。最後の難関は、この「育む」です。私も同志社に勤める教育者の端くれですが、自分自身でさえ、良心というものを日々実践していくことはとても困難です。それを生徒・学生に対してどのように育めるだろうか。究極の教育がここにあります。でも、これこそが同志社の使命なのです。私たちは、生徒・学生、そして教職員も、絶えず「共に理解する」ことを続けなければならないのではないでしょうか。そして、そのための具体的な学びが、聖書にあります。そして、この礼拝にあります。聖書を読み、自分自身と対話し、そして神と対話する。今この時こそ、実は大いなる良心教育の場であると言えるのです。

同志社の各中学校・高等学校では毎日必ず礼拝を守ります。特に私が勤める同志社女子中高では、生徒たちが学校に来る日で礼拝がない日はありません。礼拝だけ行い、下校する日もあります。讃美歌を歌い、聖書を読み、お話を聞く中で、一人ひとりの心の畑が耕されていきます。少なくとも、我々教職員はそう信じて日々を歩んでいて、我々教職員もまた生徒たちと同じく日々耕され続けています。

大学でも、このようにチャペル・アワーをはじめ、様々な礼拝がもたれています。

歴史をたどれば、この同志社は新島襄とその同志たちの熱い祈りを重ねた礼拝から始まりました。礼拝からスタートした同志社の歩みは間もなく150年を迎えます。そして、150年経た今も、礼拝は変わらず大切にされています。これこそがまさに同志社のこれからも守るべきスピリットではないでしょうか。

日々のほんのわずかな時間の中に、良心を育てていくきっかけが秘められていて、同志社という学び舎のなかで、日々良心が育まれています。

今日お読みいただいた聖書の箇所をあらためてお読みします。

「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。」（マタイによる福音書 5章13節）

地の塩である私たちは、地の塩であり続けることが求められています。地の塩であり続けること、それはまさしく、良心を持ち続けることではないでしょうか。良心を持ち続けることは、神と共に歩み続けること、これではないでしょうか。

同志社につながるみなさん、どうぞ礼拝のひと時を大切にしてください。お忙しい中と思いますが、できれば時間をつくって礼拝に出席してください。そして自分と神との尽きることのない対話のなかで、豊かな青春の日々を、良心を全身にまよって歩まれることを願ってやみません。

2022年11月9日 同志社スピリット・ウィーク秋学期
今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録